

## 児童生徒の特性からみた生徒指導の質的改善

### －高校生の攻撃性について－

朝長昌三 福井昭史 地頭菌健司

小島道生 中村千秋 小原達朗 柳田泰典

## Qualitative Improvement of Student Guidance from the Viewpoint of Special Characteristics of Pupils and Students: Aggressiveness of High School Students

Shozo TOMONAGA, Akifumi FUKUI, Kenji JITOZONO, Michio KOJIMA,  
Chiaki NAKAMURA, Tatsuro OBARA, and Yasunori YANAGIDA

人間の特性である攻撃性によって、家庭や職場、また学校においても、多くの人が傷ついている。社会生活を営む人間にとって、この攻撃性は適切に処理される必要がある。適正な攻撃性をもつことが、よりよい対人関係や心身の健康をもたらすと考えられている。

攻撃性に関しては、社会心理学、精神医学、比較行動学、大脳生理学、さらには健康心理学、行動医学、発達心理学、教育心理学の領域で研究が行われている。そして近年においては、攻撃性を人の安定した特性としてとらえているところにある。

攻撃性の安定性に関しては、男性において8歳時の攻撃性評定と30歳時の評定の相関が有意という結果が得られている。また攻撃性に関する男女の安定性の違いについては、男性の方が比較的安定性が高く、攻撃形態も一貫して、より身体的であるという結果に対して、女性はより間接的な攻撃形態をとる傾向があると報告されている。この女兒に特徴的な間接的攻撃を関係性攻撃としてとらえ、これは仲間はずれや無視をさせるといった攻撃のことを示している。このように攻撃性の安定性に関しては、発達的特徴に性差が見出されている。

攻撃性の安定性を発達の的に検討するため、朝長らはこれまで小学生および中学生の攻撃性を検討し、以下のような結果を得た。

小学生の攻撃性に関して朝長ら(2006)は、4、5、6年生全体の攻撃性は、表出性攻撃が不表出性攻撃よりも大で、統計的にも有意であるという結果を得た。また性差に関しては、表出性攻撃では男児の方が大で、不表出性攻撃では女兒の方が大であるという結果であった。またこれらの結果は、2007年の調査結果と同様の傾向であった。

中学生の攻撃性に関して朝長ら(2006)は、男子生徒の攻撃性は身体的攻撃が最も大で、女子生徒の場合は敵意が最も大であるという結果を得た。これらの結果は、2007年の調査結果と同様の傾向であった。

そこで、本研究では高校生の攻撃性を身体的攻撃、言語的攻撃、短気および敵意の4特性から検討することを目的とした。

## 方 法

### (1) 被験者

長崎市内の2高等学校生徒1694名（男子865名，女子829名）であった。1年生は男子が272名で，女子は259名，2年生は男子が281名で，女子は305名，3年生は男子が312名で，女子は265名であった。

### (2) 調 査

調査は，日本版Buss - Perry攻撃性質問紙（BAQ）を用いて行った。

本質問紙は情動的側面である「短気」，認知的側面である「敵意」，攻撃性の行動的側面である「身体的攻撃」と「言語的攻撃」の4特性を測定する下位尺度から構成されている。被験者は各質問に対して「非常によくあてはまる」，「だいたいあてはまる」，「どちらともいえない」，「あまりあてはまらない」，「まったくあてはまらない」の5段階の1つに回答した。

## 結 果

結果の処理については，以下のように行った。

各質問項目に対して「非常によくあてはまる」に5点，「だいたいあてはまる」に4点，「どちらともいえない」に3点，「あまりあてはまらない」に2点，「まったくあてはまらない」に1点を加算し，その合計点を各被験者の4特性の代表値とした。

判定基準に関しては，安藤ら（1999）のBAQの平均得点と標準偏差をもとにして作成し，各被験者の4特性の代表値にあてはめた。

統計処理に関しては，各被験者の4特性の代表値からt-検定を行い，以下のような結果を得た。

### (1) 男子生徒における攻撃性の比較

#### 1) 全学年の攻撃性 (n=865)

身体的攻撃： $\bar{x}=19.040$ ， $SD=4.80$  判定：普通

言語的攻撃： $\bar{x}=15.543$ ， $SD=3.17$  判定：普通

短気： $\bar{x}=13.971$ ， $SD=3.89$  判定：普通

敵意： $\bar{x}=18.266$ ， $SD=3.70$  判定：普通

#### ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較

$t=17.886$  ( $p<.01$ )  $df=1728$

#### ② 身体的攻撃と短気の比較

$t=24.142$  ( $p<.01$ )  $df=1728$

#### ③ 身体的攻撃と敵意の比較

$t=3.761$  ( $p<.01$ )  $df=1728$

#### ④ 言語的攻撃と短気の比較

$t=9.214$  ( $p<.01$ )  $df=1728$

#### ⑤ 言語的攻撃と敵意の比較

$t=16.434$  ( $p<.01$ )  $df=1728$

## ⑥ 短気と敵意の比較

$$t = 23.533 \quad (p < .01) \quad d f = 1728$$

以上の結果のように、1年生から3年生までの男子生徒の攻撃性は、身体的攻撃が最も大で、次に大であったのが敵意、言語的攻撃、短気の順であり、統計的にも有意であった。

## 2) 1年生の攻撃性 (n=272)

身体的攻撃： $\bar{x}=18.695$ , SD=4.79 判定：普通

言語的攻撃： $\bar{x}=15.827$ , SD=3.06 判定：普通

短気： $\bar{x}=13.614$ , SD=3.83 判定：普通

敵意： $\bar{x}=17.912$ , SD=3.69 判定：普通

## ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較

$$t = 8.314 \quad (p < .01) \quad d f = 542$$

## ② 身体的攻撃と短気の比較

$$t = 13.659 \quad (p < .01) \quad d f = 542$$

## ③ 身体的攻撃と敵意の比較

$$t = 2.134 \quad (p < .05) \quad d f = 542$$

## ④ 言語的攻撃と短気の比較

$$t = 7.448 \quad (p < .01) \quad d f = 542$$

## ⑤ 言語的攻撃と敵意の比較

$$t = 7.165 \quad (p < .01) \quad d f = 542$$

## ⑥ 短気と敵意の比較

$$t = 13.323 \quad (p < .01) \quad d f = 542$$

以上の結果のように、1年生男子の攻撃性は、身体的攻撃が最も大で、次に大であったのが敵意、言語的攻撃、短気の順であり、統計的にも有意であった。

## 3) 2年生の攻撃性 (n=281)

身体的攻撃： $\bar{x}=19.014$ , SD=4.99 判定：普通

言語的攻撃： $\bar{x}=15.605$ , SD=3.07 判定：普通

短気： $\bar{x}=14.110$ , SD=3.75 判定：普通

敵意： $\bar{x}=18.651$ , SD=3.58 判定：普通

## ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較

$$t = 9.758 \quad (p < .01) \quad d f = 560$$

## ② 身体的攻撃と短気の比較

$$t = 13.178 \quad (p < .01) \quad d f = 560$$

## ③ 身体的攻撃と敵意の比較

$$t = .991 \quad \text{有意差なし}$$

## ④ 言語的攻撃と短気の比較

$$t = 5.171 \quad (p < .01) \quad d f = 560$$

## ⑤ 言語的攻撃と敵意の比較

$$t = 10.828 \quad (p < .01) \quad d f = 560$$

## ⑥ 短気と敵意の比較

$$t = 14.691 \quad (p < .01) \quad d f = 560$$

以上の結果のように、2年生男子の攻撃性は、身体的攻撃と敵意が最も大で、言語的攻撃、短気の順であった。

## 4) 3年生の攻撃性 (n=312)

身体的攻撃： $\bar{x}=19.365$ , SD=4.62 判定：普通

言語的攻撃： $\bar{x}=15.240$ , SD=3.33 判定：普通

短気： $\bar{x}=14.157$ , SD=4.06 判定：普通

敵意： $\bar{x}=18.228$ , SD=3.79 判定：普通

## ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較

$$t = 12.797 \quad (p < .01) \quad d f = 622$$

## ② 身体的攻撃と短気の比較

$$t = 14.927 \quad (p < .01) \quad d f = 622$$

## ③ 身体的攻撃と敵意の比較

$$t = 3.366 \quad (p < .01) \quad d f = 622$$

## ④ 言語的攻撃と短気の比較

$$t = 3.644 \quad (p < .01) \quad d f = 622$$

## ⑤ 言語的攻撃と敵意の比較

$$t = 10.457 \quad (p < .01) \quad d f = 622$$

## ⑥ 短気と敵意の比較

$$t = 12.956 \quad (p < .01) \quad d f = 622$$

以上の結果のように、3年生男子の攻撃性は、身体的攻撃が最も大で、次が敵意、そして言語的攻撃、短気の順であり、統計的にも有意であった。

## (2) 女子生徒における攻撃性の比較

## 1) 全学年の攻撃性 (n=829)

身体的攻撃： $\bar{x}=16.265$ , SD=4.46 判定：普通

言語的攻撃： $\bar{x}=15.069$ , SD=3.13 判定：普通

短気： $\bar{x}=14.201$ , SD=3.78 判定：普通

敵意： $\bar{x}=17.759$ , SD=3.89 判定：普通

## ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較

$$t = 6.330 \quad (p < .01) \quad d f = 1656$$

## ② 身体的攻撃と短気の比較

$$t = 10.173 \quad (p < .01) \quad d f = 1656$$

## ③ 身体的攻撃と敵意の比較

$$t = 7.265 \quad (p < .01) \quad d f = 1656$$

## ④ 言語的攻撃と短気の比較

$$t = 5.093 \quad (p < .01) \quad d f = 1656$$

## ⑤ 言語的攻撃と敵意の比較

$$t = 15.508 \quad (p < .01) \quad d f = 1656$$

## ⑥ 短気と敵意の比較

$$t = 18.878 \quad (p < .01) \quad d f = 1656$$

以上の結果のように、1年生から3年生までの女子生徒の攻撃性は、敵意が最も大で、次が身体的攻撃、そして言語的攻撃、短気の順であり、統計的にも有意であった。

## 2) 1年生の攻撃性 (n=259)

身体的攻撃： $\bar{x}=15.911$ , SD=4.32 判定：普通

言語的攻撃： $\bar{x}=15.120$ , SD=2.56 判定：普通

短気： $\bar{x}=14.081$ , SD=3.83 判定：普通

敵意： $\bar{x}=17.367$ , SD=3.81 判定：普通

## ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較

$$t = 2.433 \quad (p < .05) \quad d f = 516$$

## ② 身体的攻撃と短気の比較

$$t = 5.104 \quad (p < .01) \quad d f = 516$$

## ③ 身体的攻撃と敵意の比較

$$t = 4.066 \quad (p < .01) \quad d f = 516$$

## ④ 言語的攻撃と短気の比較

$$t = 3.455 \quad (p < .01) \quad d f = 516$$

## ⑤ 言語的攻撃と敵意の比較

$$t = 7.492 \quad (p < .01) \quad d f = 516$$

## ⑥ 短気と敵意の比較

$$t = 9.787 \quad (p < .01) \quad d f = 516$$

以上の結果のように、1年生女子の攻撃性は、敵意が最も大で、次が身体的攻撃、そして言語的攻撃、短気の順であり、統計的にも有意であった。

## 3) 2年生の攻撃性 (n=305)

身体的攻撃： $\bar{x}=16.843$ , SD=4.63 判定：普通

言語的攻撃： $\bar{x}=15.069$ , SD=3.17 判定：普通

短気： $\bar{x}=14.177$ , SD=3.79 判定：普通

敵意： $\bar{x}=17.885$ , SD=3.94 判定：普通

## ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較

$$t = 5.518 \quad (p < .01) \quad d f = 608$$

## ② 身体的攻撃と短気の比較

$$t = 7.783 \quad (p < .01) \quad d f = 608$$

## ③ 身体的攻撃と敵意の比較

$$t = 2.993 \quad (p < .01) \quad d f = 608$$

## ④ 言語的攻撃と短気の比較

$$t = 3.153 \quad (p < .01) \quad d f = 608$$

## ⑤ 言語的攻撃と敵意の比較

$$t = 9.715 \quad (p < .01) \quad d f = 608$$

## ⑥ 短気と敵意の比較

$$t = 11.845 \quad (p < .01) \quad d f = 608$$

以上の結果のように、2年生女子の攻撃性は、敵意が最も大で、次が身体的攻撃、そして言語的攻撃、短気の順であり、統計的にも有意であった。

## 4) 3年生の攻撃性 (n=265)

身体的攻撃： $\bar{x}=15.947$ , SD=4.33 判定：普通

言語的攻撃： $\bar{x}=15.091$ , SD=3.24 判定：普通

短気： $\bar{x}=14.347$ , SD=3.73 判定：普通

敵意： $\bar{x}=17.996$ , SD=3.90 判定：普通

## ① 身体的攻撃と言語的攻撃の比較

$$t = 2.794 \quad (p < .01) \quad d f = 528$$

## ② 身体的攻撃と短気の比較

$$t = 4.559 \quad (p < .01) \quad d f = 528$$

## ③ 身体的攻撃と敵意の比較

$$t = 5.722 \quad (p < .01) \quad d f = 528$$

## ④ 言語的攻撃と短気の比較

$$t = 2.215 \quad (p < .05) \quad d f = 528$$

## ⑤ 言語的攻撃と敵意の比較

$$t = 9.558 \quad (p < .01) \quad d f = 528$$

## ⑥ 短気と敵意の比較

$$t = 11.010 \quad (p < .01) \quad d f = 528$$

以上の結果のように、3年生女子の攻撃性は、敵意が最も大で、次が身体的攻撃、そして言語的攻撃、短気の順であり、統計的にも有意であった。

## (3) 性差

## 1) 身体的攻撃

① 1年生： $t = 7.018$  ( $p < .01$ )  $d f = 529$

② 2年生： $t = 5.466$  ( $p < .01$ )  $d f = 584$

③ 3年生： $t = 9.120$  ( $p < .01$ )  $d f = 575$

以上のように、身体的攻撃に関しては男子の方が女子よりも大で、統計的にも有意であった。

## 2) 言語的攻撃

① 1年生： $t = 2.706$  ( $p < .01$ )  $d f = 529$

② 2年生： $t = 2.075$  ( $p < .05$ )  $d f = 584$

③ 3年生： $t = .806$  有意差なし

以上のように、1年生と2年生の言語的攻撃に関しては男子の方が大で、統計的にも有意であったが、3年生では有意な差はなかった。

## 3) 短気

- ① 1年生： $t = 1.406$  有意差なし
- ② 2年生： $t = .214$  有意差なし
- ③ 3年生： $t = .582$  有意差なし

以上のように、短気に関しては女子の方が大であったが、統計的に有意ではなかった。

## 4) 敵意

- ① 1年生： $t = 1.672$  有意差なし
- ② 2年生： $t = 2.455$  ( $p < .05$ )  $df = 584$
- ③ 3年生： $t = .721$  有意差なし

以上のように、2年生の敵意に関しては男子の方が大で、統計的にも有意であったが、1年生と3年生においても男子の方が大であったが、統計的には有意でなかった。

## 考 察

現代社会において、子に対する親の愛情と関心が、子どもの親からの独立を妨げ、また極端な過保護傾向が欲求不満耐性の低い子どもを育てることになるとされている。そのような状況で育った青年は、豊か過ぎる物質過剰社会において、過剰に抱く欲求に対して充足できないなかで欲求不満の状態に陥る。そして子どものときに培われた欲求不満耐性の低さが、さらに欲求不満を増幅させることになる。このような青年期の不安定な発達要因が、攻撃行動の下地となっている可能性があると考えられている。

文部科学省(2006)は、キレる子どもの生育歴に関する研究で、キレた子どもの性格的傾向の分類を行った。すなわち(1)耐性が欠けていることが認められる性格的傾向(耐性欠如型)、(2)攻撃性が認められる性格的傾向(攻撃型)、(3)不満を抱え込んでいることが認められる性格的傾向(不満型)に分類した。そして男子高校生の場合、劣等感に起因すると思われる「不満型」と「不満+耐性欠如型」の割合が高いという結果が得られている。

曾我(2001)は、中学生における攻撃性と性格特性との関係分析を行い、短気、身体的攻撃および言語的攻撃と強く結びついているのは性格特性の外向性であり、敵意と最も強く関係しているのは協調性であるとした。これに対して曾我は、外向性の高い人は行動ばかりでなく情緒反応を抑制することが苦手なため、ささいなことでも怒りを喚起しやすく短気傾向を示すと考えた。また外向性は情緒や行動の表出傾向を示す性格特性であるため、攻撃性の行動的構成要素である身体的攻撃および言語的攻撃と強い関係をもつと考えた。さらに敵意は他者に対する否定的な信念・態度で、特に対人関係認知にかかわる攻撃性であり、人間関係の重視や共感・思いやりなどの対人的要素の強い協調性から強い影響を受けるとした。これらの研究結果からさらに、緊張、不安、抑うつなどの情緒性は、中学生以降に攻撃性と関係をもち始めるとした。

そこで本研究の目的は、高校生の攻撃性を身体的攻撃、言語的攻撃、短気および敵意から検討することであった。

## (1) 男子生徒全体の攻撃性

男子全体の攻撃性に関しては、身体的攻撃が最も大で、次に大であったのが敵意で、

順に言語的攻撃，短気で統計的にも有意な差があった。また判定基準においては，すべて「普通」であった。

判定基準の「やや強い」と「非常に強い」を「強い攻撃性」とした場合，「強い身体的攻撃」の割合は25%であった。また「強い言語的攻撃」は16%，「強い短気」は12%，「強い敵意」は17%であった。

以上のように，男子高校生の攻撃性に関しては身体的攻撃が大であったことから，男子高校生の攻撃性は緊張，不安，抑うつなどの情緒性と関係し，特に欲求不満や欲求不満耐性の低さと関係していることが考えられた。

攻撃性の4特性のうち「強い攻撃性」を1つでも有している場合を「1要因型」としたとき，46%の男子生徒が1要因型であった。また4特性のすべてが「強い攻撃性」の場合を「4要因型」としたとき，1%の男子生徒が4要因型であった。

## (2) 1年生男子の攻撃性

1年生男子の攻撃性に関しては，身体的攻撃が最も大で，次に大であったのが敵意で，順に言語的攻撃，短気で統計的にも有意な差があった。また判定基準においては，すべて「普通」であった。

「強い身体的攻撃」の割合は21%，「強い言語的攻撃」は17%，「強い短気」は11%，「強い敵意」は14%であった。また「1要因型」は43%で，「4要因型」は1%であった。

## (3) 2年生男子の攻撃性

2年生男子の攻撃性に関しては，身体的攻撃が最も大で，次に大であったのが敵意で，順に言語的攻撃，短気であった。しかし身体的攻撃と敵意の間には統計的にも有意な差はなかった。また判定基準においては，すべて「普通」であった。

「強い身体的攻撃」の割合は26%，「強い言語的攻撃」は16%，「強い短気」は11%，「強い敵意」は20%であった。また「1要因型」は47%で，「4要因型」は1%であった。

## (4) 3年生男子の攻撃性

3年生男子の攻撃性に関しては，身体的攻撃が最も大で，次に大であったのが敵意で，順に言語的攻撃，短気で統計的にも有意な差があった。また判定基準においては，すべて「普通」であった。

「強い身体的攻撃」の割合は26%，「強い言語的攻撃」は16%，「強い短気」は15%，「強い敵意」は16%であった。また「1要因型」は47%で，「4要因型」は1%であった。

## (5) 女子生徒全体の攻撃性

女子生徒全体の攻撃性に関しては，敵意が最も大で，次に大であったのが身体的攻撃，そして言語的攻撃，短気の順で統計的にも有意であった。また判定基準ではすべて「普通」であった。

「強い身体的攻撃」の割合は18%，「強い言語的攻撃」は13%，「強い短気」は14%，「強い敵意」は21%であった。

以上のように，女子高校生の攻撃性に関しては敵意が大であったことから，女子高校



生の攻撃性は、敵意が他者に対する否定的な信念・態度で、特に対人関係認知にかかわる攻撃性であることから、人間関係の重視や共感・思いやりなどの対人的要素の強い協調性に問題があることが考えられた。

また「1要因型」は43%で、「4要因型」は1%であった。

#### (6) 1年生女子の攻撃性

1年生女子の攻撃性に関しては、敵意が最も大で、次に大であったのが身体的攻撃、そして言語的攻撃、短気の順で統計的にも有意であった。また判定基準ではすべて「普通」であった。

「強い身体的攻撃」の割合は16%、「強い言語的攻撃」は12%、「強い短気」は14%、「強い敵意」は17%であった。また「1要因型」は39%で、「4要因型」は1%であった。

#### (7) 2年生女子の攻撃性

2年生女子の攻撃性に関しては、敵意が最も大で、次に大であったのが身体的攻撃、そして言語的攻撃、短気の順で統計的にも有意であった。また判定基準ではすべて「普通」であった。

「強い身体的攻撃」の割合は22%、「強い言語的攻撃」は14%、「強い短気」は14%、「強い敵意」は26%であった。また「1要因型」は49%で、「4要因型」は2%であった。

#### (8) 3年生女子の攻撃性

3年生女子の攻撃性に関しては、敵意が最も大で、次に大であったのが身体的攻撃、そして言語的攻撃、短気の順で統計的にも有意であった。また判定基準ではすべて「普通」であった。

「強い身体的攻撃」の割合は15%、「強い言語的攻撃」は14%、「強い短気」は12%、「強い敵意」は22%であった。また「1要因型」は40%で、「4要因型」は4%であった。

#### (9) 性 差

発達の研究において、攻撃行動の性差は、誕生の約3年目以降から現われることが明らかになっている。そして就学前の年齢以後から、男子の攻撃、特に身体的攻撃の程度が高まることがわかっている。また攻撃行動の発達過程が男子と女子で異なるという報告もある。すなわち、ほとんどの女子が、青年期に攻撃的になり始め、また深刻な暴力への関与は女子の方が男子よりも早く頂点に達するとされている。

青年期における女子の攻撃行動は、男子よりもかなりの程度、非攻撃的なものになるのに対して、男子は女子よりも頻繁に攻撃を用いる傾向が持続されるところに性差があるとされている。

しかしながら攻撃の性差は、攻撃行動の種類によって変動するということも考慮に入れる必要があるとされている。すなわち性差は、言語的攻撃に比べ身体的攻撃の指標上で大きく、また間接的攻撃に比べ直接的攻撃の指標上で大きい。女子の攻撃性に関しては、関係性攻撃のようなより間接的な形態の攻撃を行う可能性が高いともされている。したがって、より間接的な攻撃形態をとる女子に対して、より直接的な攻撃形態をとる

男子と同様に、直接的な攻撃形態を測定し、性差を検討することには議論をよぶ問題の1つでもある。

そこで、攻撃性の4特性である身体的攻撃、言語的攻撃、短気および敵意に関する性差を検討した。

#### 1) 身体的攻撃

1年生においては、男子の方が女子よりも大で、統計的にも有意であった。また「強い身体的攻撃」の割合は男子が21%で、女子は16%であった。

2年生においては、男子の方が女子よりも大で、統計的にも有意であった。また「強い身体的攻撃」の割合は男子が26%で、女子は22%であった。

3年生においては、男子の方が女子よりも大で、統計的にも有意であった。また「強い身体的攻撃」の割合は男子が26%で、女子は15%であった。

以上のように、身体的攻撃に関しては男子の方がより攻撃的であるといえる。したがって男子高校生の攻撃性は、女子よりも緊張、不安、抑うつなどの情緒性が強く、欲求不満や欲求不満耐性の低さが起因していると考えられた。

#### 2) 言語的攻撃

1年生においては、男子の方が女子よりも大で、統計的にも有意であった。また「強い言語的攻撃」の割合は男子が17%で、女子は12%であった。

2年生においては、男子の方が女子よりも大で、統計的にも有意であった。また「強い言語的攻撃」の割合は男子が16%で、女子は14%であった。

3年生においては、男子の方が女子よりも大であったが、統計的にも有意ではなかった。また「強い言語的攻撃」の割合は男子が16%で、女子は14%であった。

以上のように、言語的攻撃に関しても身体的攻撃と同様に、男子の方がより攻撃的であるといえる。したがって男子高校生の攻撃性は、女子よりも情緒性が強く、欲求不満や欲求不満耐性の低さが起因していると考えられた。

#### 3) 短気

1年生においては、女子の方が男子よりも大であったが、統計的にも有意ではなかった。また「強い短気」の割合は男子が11%で、女子は14%であった。

2年生においては、女子の方が男子よりも大であったが、統計的にも有意ではなかった。また「強い短気」の割合は男子が11%で、女子は14%であった。

3年生においては、女子の方が男子よりも大であったが、統計的にも有意ではなかった。また「強い短気」の割合は男子が15%で、女子は12%であった。

以上のように、情緒反応を抑制することが苦手なために、ささいなことで怒りを喚起しやすい短気傾向に関しては、統計的にも有意ではなかったが、女子の方が大きいという結果であった。

#### 4) 敵意

1年生においては、男子の方が女子よりも大であったが、統計的にも有意ではなかった。

た。また「強い敵意」の割合は男子が14%で、女子は17%であった。

2年生においては、男子の方が女子よりも大で、統計的に有意であった。また「強い敵意」の割合は男子が20%で、女子は26%であった。

3年生においては、男子の方が女子よりも大であったが、統計的に有意ではなかった。また「強い敵意」の割合は男子が16%で、女子は22%であった。

敵意に関しては、女子では他の3特性の中では最も高かったが、性差は男子生徒の方が大であった。このようなことから、男子高校生は女子に比べると、情緒が不安定で、欲求不満が高く、また欲求不満耐性も低い、さらには協調性にも問題があるため、攻撃性が高いと考えられる。

## 要 約

本研究の目的は、高校生の攻撃性を身体的攻撃、言語的攻撃、短気および敵意から検討し、以下のような結果を得た。

- (1) 男子生徒の攻撃性
  - 1) 全学年の攻撃性
    - ① 身体的攻撃が最も大で、統計的にも有意であった。
    - ② 「強い攻撃性」に関しては、「強い身体的攻撃」の割合が最も大で、25%であった。
    - ③ 1要因型は46%で、4要因型は1%であった。
  - 2) 1年生の攻撃性
    - ① 身体的攻撃が最も大で、統計的にも有意であった。
    - ② 「強い攻撃性」に関しては、「強い身体的攻撃」の割合が最も大で、21%であった。
    - ③ 1要因型は43%で、4要因型は1%であった。
  - 3) 2年生の攻撃性
    - ① 身体的攻撃が最も大で、統計的にも有意であった。
    - ② 「強い攻撃性」に関しては、「強い身体的攻撃」の割合が最も大で、26%であった。
    - ③ 1要因型は47%で、4要因型は1%であった。
  - 4) 3年生の攻撃性
    - ① 身体的攻撃が最も大で、統計的にも有意であった。
    - ② 「強い攻撃性」に関しては、「強い身体的攻撃」の割合が最も大で、26%であった。
    - ③ 1要因型は47%で、4要因型は1%であった。
- (2) 女子生徒の攻撃性
  - 1) 全学年の攻撃性
    - ① 敵意が最も大で、統計的にも有意であった。
    - ② 「強い攻撃性」に関しては、「強い敵意」の割合が最も大で、21%であった。
    - ③ 1要因型は43%で、4要因型は1%であった。
  - 2) 1年生の攻撃性
    - ① 敵意が最も大で、統計的にも有意であった。
    - ② 「強い攻撃性」に関しては、「強い敵意」の割合が最も大で、17%であった。
    - ③ 1要因型は39%で、4要因型は1%であった。
  - 3) 2年生の攻撃性

- ① 敵意が最も大で、統計的にも有意であった。
- ② 「強い攻撃性」に関しては、「強い敵意」の割合が最も大で、26%であった。
- ③ 1要因型は49%で、4要因型は2%であった。

#### 4) 3年生の攻撃性

- ① 敵意が最も大で、統計的にも有意であった。
- ② 「強い攻撃性」に関しては、「強い敵意」の割合が最も大で、22%であった。
- ③ 1要因型は40%で、4要因型は4%であった。

#### 参考文献

- 市村操一 (2004) 怒りのコントロール ブレーン社
- 神田信彦・酒井久美代・杉山成 (2005) なぜ攻撃してしまうのか ブレーン社
- 木野和代 (2000) 日本人の怒りの表出方法とその対人影響 心理学研究, 70, No. 6, 494-502。
- 大竹恵子・島井哲志・曾我祥子・嶋田洋徳 (1998) 中学生用攻撃性質問紙 (HAQS) の作成 (1) 日本心理学会第62回大会発表論文集, 930。
- 嶋田洋徳・神村栄一・宇津木成介・安藤明人 (1998) 中学生用攻撃性質問紙 (HAQS) の作成 (2) 日本心理学会第62回大会発表論文集, 931。
- 島井勝之・山崎勝之 (2002) 攻撃性の行動科学－健康編 ナカニシヤ出版
- 曾我祥子・嶋田洋徳 (2001) 中学生の攻撃性と性格特性 日本心理学会第65回大会発表論文集, 533。
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典 (2006) 中学生の攻撃性に関する研究 長崎大学教育学部教育実践総合センター紀要, 5, 183-200。
- 朝長昌三・福井昭史・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典 (2007) 中学生における攻撃性の傾向に関する研究 長崎大学教育学部教育実践総合センター紀要, 6, 1-13。
- 山崎勝之 (2002) 攻撃性の行動科学－発達・教育編 ナカニシヤ出版